

古式小豆島遍路の風景

大賀睦夫

はじめに

本稿の目的は、小豆島遍路の当初の姿、すなわち神仏分離以前の小豆島遍路を再現し、今日の遍路と比較し、遍路の意義を問い直すことである。

小豆島八十八ヶ所霊場の創設は、貞享三年（1686）といわれる。それ以来、長い歴史があるが、その間にとくに大きな転換点があった。それは明治維新の神仏分離である。神仏分離令によって、小豆島八十八ヶ所霊場から神社と別当寺が強制的に排除された結果、小豆島遍路は、それ以前と比べてかなり趣の異なるものになったのではないと思われる。

もともと小豆島遍路を含む四国遍路は、神仏習合の時代に成立したものである。神社には祭神とともに本地仏が祀られていた。遍路では寺院とともに神社も訪ね、神仏を礼拝した。その際、「拝し奉るこの処の御本尊、大師、大神宮、鎮守、総じて日本大小の神祇、・・・」と祈念文を唱えていた。¹このような礼拝の作法は、現在の小豆島遍路でもそのまま生きており、この文言が今も唱えられている。にもかかわらず、現在の遍路では、たとえば旧札所の八幡宮の鳥居の前を素通りし、その近くの堂庵でおつとめをするというのが実情である。「日本大小の神祇」と唱えながら、神社には行かない。なにか、ちぐはぐな印象なのである。神仏分離で神道的要素を排除することによって、遍路からなにか大切なものが失われたのではないかと思う。神仏分離以前の小豆島遍路はどのようなものだったのだろうか。

さいわい、江戸時代の霊場を紹介した『小豆嶋名所圖會』²が残っているので、これを片手に江戸時代の小豆島八十八ヶ所霊場を実際に歩いて訪ねることによって、当時の小豆島遍路を追体験しようと考えた。以下はその記録である。

1. 小豆島遍路の歴史の変遷

(1) 小豆島遍路の成立

本論に入る前に、まず予備知識として、小豆島遍路の起源と歴史の変容について簡単に述べておきたい。

¹ 真念『四国遍路道指南』（貞享四年、1687）に、「紙札うち様の事、其札取、本尊・大師・太神宮・鎮守、惣じて日本大小神祇、天子・將軍・国主・主君・父母・師長・六親・眷族乃至法界平等利益と打べし。」（伊予史談会（1981）72ページ）と書かれているので、これは非常に古い口上であるようだ。現在の小豆島遍路でも唱えられているので、小豆島でも江戸時代からあったものだろう。

² 暁鐘成が『淡路国名所圖會』（1851）に続いて著したものであるが、結局、上梓されなかった。香川叢書第三に収録されている。

小豆島八十八ヶ所霊場がいつ成立したかについては諸説ある。『小豆郡誌』によると、貞享三年（1686年）とされている。「貞享三年に至りて、本郡に於ける真言宗の緇素相諮り、四国八十八ヶ所の霊場に擬へ、小豆島八十八ヶ所の霊場を創設す、其の際寺院のみにては其の数に充たざりしを以て、各所に浄域を撰び、新たに堂庵を建立し以て、現在の霊場を定めたりしといふ」。³

郷土史家の川野正雄氏はこれに疑問を呈している。「四国八十八箇所のミニチュアである島四国八十八箇所が開かれたのは、貞享三年（1686）といわれているけれども、八十八箇所のうちの本寺である西村の阿弥陀寺、室生の愛染寺、池田の光明寺、中山の浄土寺、大部の観音寺など、もともと古い寺であろうが、その復興は貞享以後の元禄あるいは元文年間という伝承があるところから考えると、案外もっと時代は下るのではあるまいかと思う。」と述べている。⁴彼は、小豆島に現存する往来手形から、小豆島遍路の始まりを宝暦年間（1751~1764）と推測している。

ただ、それも小豆島遍路の往来手形かどうか不明である。「島四国」という語を確認できる確実な史料は、天保年間の旧大銀村文書だという。⁵

しかしながら、史料がないという理由で貞享三年説を疑問視するのはいかがなものか。小豆島では、四国より小豆島の方が遍路の成立は早かったという伝承がある。四国の遍路は「本四国」と言うが、小豆島の方が早かったので、小豆島の遍路は「元四国」である、というほどに小豆島遍路は独自色が強いし、本四国への対抗心もある。澄禅の『四国遍路日記』が承応二年（1653）、真念が『四国遍路道指南』を書いたのが、貞享四年（1687）であり、その頃すでに四国遍路が成立していたとすると、同じ四国の小豆島で、それから100年近く経ってようやく遍路が成立したと考えるべきだろうか。案外、貞享三年説が事実なのかもしれない。

正確にはわからないが、遅くとも天保年間に島四国の記録があることは確かである。また、写し霊場というが、単なる本四国のコピーではないことも確かである。何もないところにつくられた写し霊場は、88の霊場の名称までも写している。しかし、小豆島の「島四国」と「本四国」に共通するのは、88の霊場を巡拝するという骨格部分であって、それ以外の肉付けは独自に行っている。⁶小豆島には修験道は中世からあったし、お遍路の前身である辺路修行も古くから行われていたであろう。お遍路に近い行為は古くからあったはずである。それが基礎になって小豆島に八十八ヶ所霊場が成立したのが、貞享三年、あるいはその他の成立年である。それ以来、長い年月が流れている。当然、小豆島遍路の風景は大きく変わった。しかし、自然的要素、たとえば海、山、山岳霊場の行場、山からの眺望などあまり変わらないものもあるだろう。以下、変化したもの変化しないものを整理して

³ 香川県小豆郡役所（1921、1973）223 ページ。

⁴ 川野正雄（1970）26 ページ。

⁵ 小田匡保（1996）171 ページ。

⁶ 大川栄至（2009）は、小豆島遍路について書かれたもっとも詳しい論文であるが、そこではとくに小豆島遍路の独自性が強調されている。

みたい。

(2) 小豆島遍路の変遷

『小豆嶋名所圖會』の記述と現状とを照らし合わせてみよう。札所の番号や巡拝のルートは基本的に大きな変化がない。小豆島の地図は、よく牛の形にたとえられる。小豆島を牛の形に見ると、後ろ足の部分に第1番札所洞雲山があって、ここから左回りに札所の番号が付けられている。後ろ足から、腹部、前足、首、頭、背中を通過して、お尻の部分の第88番札所楠霊庵で結願となる。この札所の番号やルートは今も昔も基本的に変わらない。もちろん、道が拡幅舗装され、新しい道ができ、ダムで古い遍路道が水没して消滅するなど、細部はかなり変わっている。

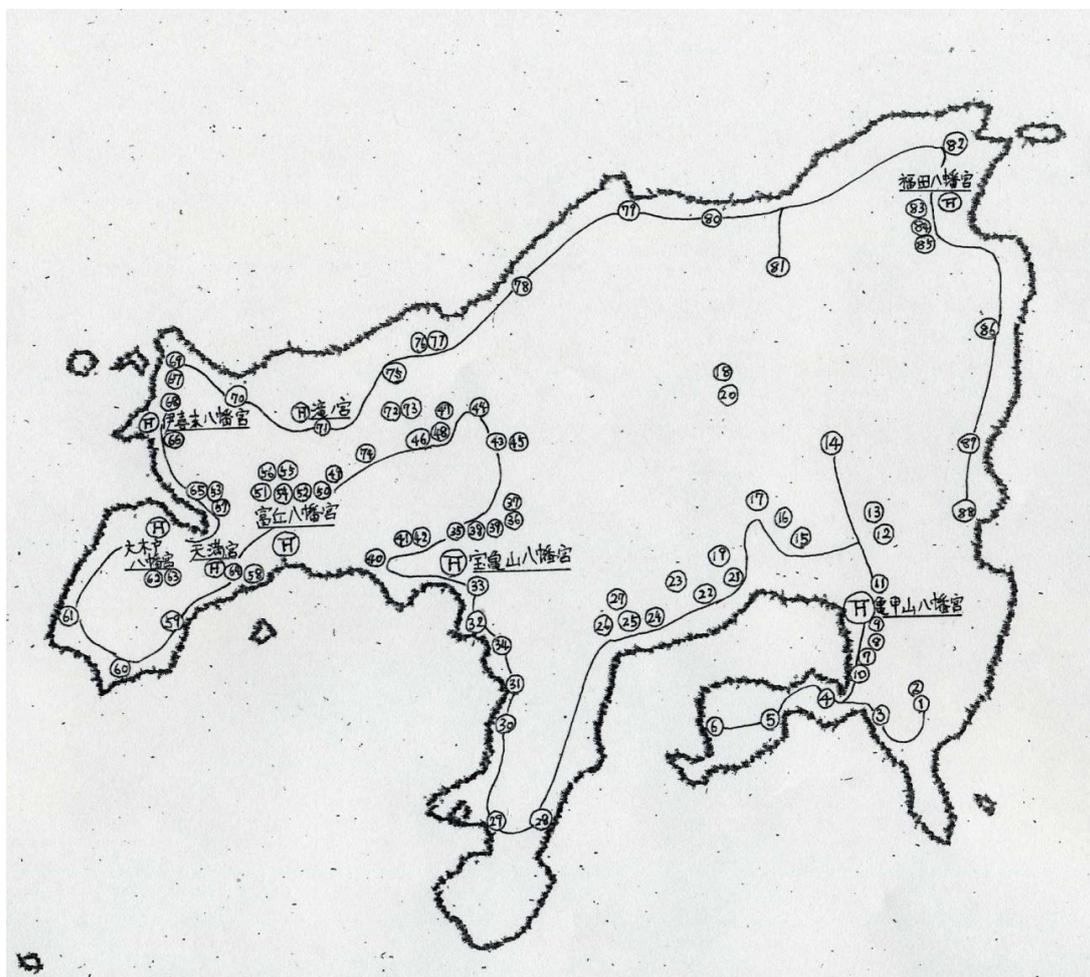


図1 現在の小豆島遍路札所と旧札所神社の位置、および古式小豆島遍路の巡拝ルート

小豆島遍路は第一番札所から回るものだったかどうか判然としない。しかし、新たにつくったものであれば、第一番から回るのが基本だったと考えるのが自然ではないだろうか。洞雲山が第一番札所になったということは、小豆島霊場が成立した当初、島外からは主として坂手港にお遍路さんがやってくると想定されていたのであろう。『小豆嶋名所圖會』の坂手浦小嶋湊の紹介文には「西國・北國の廻船ここに泊まり、順風を待湊なるゆへ、海船常に出入して繁昌の地なり。・・・所謂當浦は、此嶋に於いて土庄・下村・坂手の三津の一にして、頗る豊饒の海濱なり。」とある。⁷

しかしながら近代化の過程で、次第に土庄が小豆島の交通の中心地になっていった。神仏分離で打撃を受けた小豆島遍路を立て直すためにつくられた小豆島霊場総本院も、⁸大正2年に、土庄にできた関係で、今日では、ここで受戒し、近くの第64番札所松風庵から、すなわち小豆島の頭の部分から歩き始め、小豆島の背中、後ろ足と順に打って、首の部分の第56番札所行者堂で結願するというパターンが定着している。札所の番号と巡拝ルートは基本的に変化していないが、打ち始めと結願の札所が変わったということである。

札所の番号と巡拝ルートは基本的に変わっていないが、前述のとおり、神社系の霊場が廃止になったことは大きな変化であった。これら廃止になった霊場の数は13である。⁹88の内の13なので、決して少ない数ではない。ただ、これらに代わる札所は近くの寺院や堂庵に新設された。このため巡拝の順番が若干前後したり、札所が一ヶ所に三つある宝生院のような霊場もできたが、全体としての巡拝ルートは大きく変わらなかったのである。

小豆島の風景で大きく変わったのは、塩田の消滅である。『小豆嶋名所圖會』の絵を見ると、江戸時代には塩業が盛んで、小豆島の各地に塩田があったことが分かる。塩田は、近代以降も高度成長期の頃まで見られたが、現在は、宅地や商業地などに変貌している。また、塩づくりのための燃料として、かつては大量の木が伐採された。『小豆嶋名所圖會』を見ても、山の木が現在より少なかったようである。また自給自足の暮らしであったために、山のかなり上まで切り開かれて段々畑がつくられていた。

小豆島遍路のスタイルを大きく変化させたのは、近代化の過程における動力源の変化であり、モータリゼーションであった。かつては、お遍路は誰もが自分の足で歩いた。馬に乗った人もあったかもしれないが、乗り物を利用する場合は、舟が身近な存在であった。今日の小豆島遍路では舟は一切利用されていないが、悪路で車もなかった昔は舟が利用されていた。大正時代に遍路をした荻原井泉水は、田ノ浦半島と三都半島の札所に行く際に舟に乗ったと記している。¹⁰かつては、これらの二つの半島への道がよくなかったために舟便があったようである。また、小豆島北東部の吉田や福田への陸路は険しい山道だったので、よく舟が利用された。

⁷ 暁鐘成、430 ページ。なお、下村浦は、現在の草壁港である。

⁸ 明治中期には小豆島霊場は存亡の危機にあった。『月刊ぴーぷる』31 ページ。

⁹ 小田 1996、172 ページは、14 の札所としているが、筆者が数えたところでは 13 の札所が廃止になった。

¹⁰ 荻原井泉水（1934）、88、101 ページ。

時代はずっと下って、高度成長の頃は、大型バスを連ねて大勢のお遍路さんがやってきた。概して古くからの島の道は狭いが、大型バスが入れるところまで行って、後は歩いて巡拝し、バスに戻って来るというスタイルだった。高度成長で日本が豊かになっていた頃は、小豆島遍路も非常に賑わっていた。昔を知るお遍路さんに聞くと、当時は、礼拝でも納経でも他の団体と競争だったという。お遍路さんが減少を続けている近年は、マイクロバスの利用が主流である。道路はいっそう整備され、山岳霊場を含め、どこの札所にもマイクロバスで行くことができるようになっている。

車で遍路をするようになると、お遍路さんと島の人々との交流も少なくなる。かつては、島の子どもたちはお遍路さんから豆をもらうのが習慣だった。子どもたちは「お遍路さん、お豆ちょうだい」とお遍路さんを見つけては豆をもらうのが楽しみだったという。しかし、車遍路では路上の出会いが少ない。また、時代の変化で、だんだん物をもらうのがよい習慣とは考えられなくなった。お遍路さんと子どもたちとのうるわしい交流も、現在では、ほとんどなくなってしまったようだ。誰もが歩いていた時代には、いたるところに茶店があり、村々には遍路宿があり、島の人々と旅人との交流があった。車時代の現在、茶店は消滅し、遍路宿は減少の一途をたどっている。現在では、歩き遍路は、霊場会などが主催する歩き遍路のイベントか個人で来るお遍路さんなど、ごく一部になってしまった。これもまたお遍路風景の変化の一部である。

伝統的に小豆島遍路は団体による遍路が多かった。とりわけ山陰・関西方面からの団体が多かった。札所の寺院の玉垣などに寄進者の名前が彫られているが、個人名とともに団体名がよく見られる。〇〇伝道団、〇〇巡拝団、〇〇大師講などである。日本人のライフ・スタイルの変化を反映して、近年、これらの団体が急速に消滅している。残っている巡拝団も極端な高齢化が進んでいる。ある札所のご住職の話では、最盛期と比較するとこのような団体が100以上消滅したのではないかという。小豆島遍路の関係者は、誰もが「危機です」と口をそろえる。小豆島遍路も新たな転換期を迎えていることはまちがいないようである。

札所の風景の変化について、『小豆嶋名所圖會』の絵と現在を比較したときの違いは、日本が豊かになって建物が立派になったということである。民家も立派になったし、ビルが建つようになった。寺院や堂庵の建物も立派になった。かつての堂庵は「四つ堂」と呼ばれた壁のないあずま屋だったが、今日ではそのような歴史的建築物をほとんど見出すことができない。また、今日の山岳霊場では、洞窟の入り口を覆うように大きな建物が建てられているが、江戸時代は、より小規模の投入堂のようなものが洞内につくられていただけだった。

ここで昭和初期の小豆島遍路の写真をいくつか掲げておきたい。古い時代の小豆島遍路を偲ぶよすがとしたい。



図2 麦畑の中を歩く



図3 田の浦の港



図4 茶店で休憩



図5 第60番札所江洞窟

(図2~5: 昭和9年、森瑛二氏撮影、土庄町立中央図書館提供)

2. 小豆島遍路の構成要素

本稿の目的は、小豆島遍路の変遷について、とくに神仏分離の影響に焦点を合わせて考えてみることである。小豆島遍路から神道的要素がなくなってどう変わったかの検討である。そこで次に、小豆島遍路の諸々の構成要素について考え、その中で神道的要素がどのような意味をもったかについて考えてみたい。

(1) 小豆島遍路の四要素

今日、多くの人々がもつお遍路のイメージと、実際の四国遍路（小豆島遍路を含む）との間には、かなりのギャップがあるようだ。霊場会は、四国八十八ヶ所霊場は、空海・弘法大師によって開創されたと説明しているの、大師信仰のみが強調される傾向がある。しかし今日、四国遍路の研究者は、四国遍路の構成要素をもっと多様に捉えている。五来重氏は次のように述べる。「四国遍路は四国の辺路から始まっている、というのは今日常識でしょう。そうすると辺路は弘法大師以前からのものですから、四国遍路は弘法大師が始められたというのは疑問です」¹¹辺路（へじ）とは海と陸との境を歩く修行のことである。五来氏は、それが四国遍路の始まりだということである。

また、四国遍路は寺を巡拝するので、仏教の修行だと一般には思われている。しかし前述のとおり、明治維新より前のわが国の伝統的宗教は神仏習合だったので、四国八十八ヶ所の霊場には神社も含まれていた。仏教だけでなく、神道も四国遍路の構成要素のひとつだったのである。さらにまた、霊場を歩いて巡るという修行自体が、必ずしも仏教や神道固有の修行というわけではないという事実がある。仏教とも神道とも異なる伝統があったわけである。四国遍路の構成要素は意外に多様であるといえよう。

頼富本広氏は『四国遍路とはなにか』の中で、四国遍路につながる諸要素を列挙している。大師信仰、西国巡礼、修験道、補陀落信仰、山林修行、衛門三郎伝説などである。¹²本稿は詳細な歴史研究を意図したものではないので、もっと簡略化して、四国遍路の構成要素には、太古的霊性、仏教、神道、修験道の四つがあったと捉えておきたい。

第一に、四国遍路には、仏教や神道以前のアニミズム的要素があるということがしばしば指摘される。ここでは、これを太古的霊性と呼ぶことにしたい。第二に、四国遍路に仏教的要素があることはあまりにも自明である。霊場としてのお寺、礼拝対象の仏像、般若心経、等々。そして第三に、前述のとおり、神社も霊場であったので、神道的要素もある。第四に、仏教、神道と関連しながらも独自の要素として修験道があげられる。頼富氏は熊野信仰の重要性をとりわけ強調している。本稿で考察の対象にするのは小豆島八十八ヶ所であるが、小豆島八十八ヶ所できくにお遍路さんを引きつけているのは修験道の行場である。

¹¹ 五来重（2009）、16 ページ。

¹² 頼富本広（2009）、2～4 章参照。

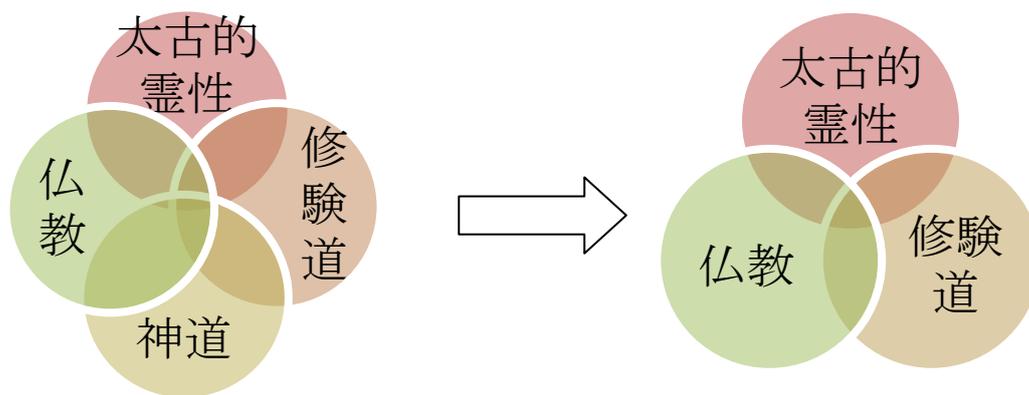


図6 小豆島遍路構成要素の変化（仮説）

ところが明治維新の神仏分離によって、小豆島遍路の構成要素も大きく変化せざるをえなかった。神社や別当寺にあった霊場は廃止され、本尊は別の場所に移された。前述のとおり、小豆島遍路の場合、神社と別当寺合わせて13の札所が廃止された。今日、小豆島遍路における神道的要素としては、鳥居をくぐって本尊の仏像をお参りする札所があったり、寺院の境内に小さな神社があったりなど、わずかに神仏習合のなごりが残っている程度である。このように、遍路における神道的要素はほとんどなくなった。札所の数が足りず、堂庵も札所に含めて八十八を揃えた小豆島八十八ヶ所霊場においては、八幡宮などの神社は札所として大きな存在だったと思われる。そのような場所に行かなくなるというのは、小豆島遍路の性格が変わるほどの変化だったのではないだろうか。以上を図式化すると図6のようになるであろう。

次に、小豆島遍路の各構成要素が、お遍路にどのような性格を与えてきたかを考察してみたい。

（2）太古的靈性

四国遍路は、非常に古い原始的宗教といえるものをその基礎にもっている。そのことは宗教民俗学者が指摘しているし、またわれわれが実際に遍路体験をして感じるところでもある。

四国遍路は弘法大師が始められたと一般に言われるほど、遍路は大師信仰が基礎になっているが、五来重氏は、空海真言密教の成立する根底に、より古い山岳宗教と海洋宗教の行的世界があったという。¹³空海が身を投じたこれらの修行は、日本の原始的信仰に由来するものであり、そこから後世の修験道や遍路が生まれたという。五来氏によると、遍路はもともと海洋信仰の辺路（辺地）修行であった。四国の辺路とは、「海辺を窟籠り木食草衣で行道修行してまわるものだった。」¹⁴山岳修行も辺路修行も、浄行をおこなった。頼富

¹³ 五来（1994）、119 ページ。

¹⁴ 五来、107 ページ。

氏も、四国遍路の構成要素のひとつにこのような原始的信仰があるという宗教民俗学の見解に賛同している。¹⁵

「木食草衣」の修行と比較すると、現在の四国遍路はぜいたく極まりないが、それでも太古的靈性のなごりとでもいえるものを見出すことができる。それは、遍路に教義的なものが少なく、自然体験から学ぶことを重視しているところである。遍路では、ことばではなく、自然そのものから人生の生き方を学びとるのである。たとえば、毎日歩くのがお遍路であるが、お天気は晴れだったり、雨だったりする。晴れの日も、雨の日も、歩き続ける。そして、やがて人生もそうなのだと気づく。人生にも、晴れの日、雨の日がある。たとえ雨の日であってもめげずに生きていかななくては、と思うようになる。このような感性や象徴的思考法は、古代的宗教あるいは原始宗教の特徴である。

四国遍路には教義的なものは少なく、そのかわり、象徴やたとえ話がある。「人生は遍路なり」、一人旅でも「同行二人」、お遍路さんの杖は「金剛杖」、白衣は死と再生をあらわす、などである。エリアーデやスウェーデンボルグは、古代人は象徴的思考法により、自然から靈的な意味を汲み取ったという。そのように、われわれもお遍路を通して、自然が語る言葉を学びとっていく。空海も悟りの境地はことばでは表現できないという。むしろ、たとえば文字通りの「明鏡止水」の風景に遭遇して悟るということがあるのかもしれない。自然のつくりだす無限の風景は、無限の教えである。自然から真理を学ぶことこそ重要ではないだろうか。遍路の構成要素としての太古的靈性の意義はそこにあると思われる。¹⁶

(3) 仏教

四国遍路では、札所の本尊仏を前に、懺悔文、三帰、三竟、十善戒、発菩提心真言、三摩耶戒真言、般若心経、十三仏真言、光明真言、大師宝号、廻向文などを唱える。

これらは、非常にシンプルな仏教の教えであるが、実に中身が濃い。すべて悪業は貪瞋癡の三毒に由来する。不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見を戒めとする。そして空の思想をもつ。有にも無にもとらわれない、肯定にも否定にもとらわれない。自利利他行を実践する。ただそれだけの教えである。これを何百回、何千回と唱えることで、自家薬籠中のものとする。そして随時これを思い出して、自分の心をわずかでも上に引き上げる。結局、人間であるかぎり、十善戒を完全に守るのは不可能であろう。しかし、善か悪かの選択の場面に遭遇したときに、ひとつでも多く善を選択することができれば、これらの教えを唱える意味は十分にあるといえよう。

地球環境問題、物質的豊かさの反面の生きがいの喪失など、現代文明は明らかに行き詰っている。今、仏教国ブータンの国づくりが注目されているが、現代の危機に対するひとつの処方箋は、仏教の教えであると思われる。梅原猛氏は、大乘仏教の現代的意義を次のように述べているが、筆者も全面的に賛意を表明したい。「現代文明はまさに人間を宗教や

¹⁵ 頼富 (2009) 38 ページ。

¹⁶ 遍路における太古的靈性については、大賀 (2011) を参照願いたい。

道徳の束縛から解放し、人間の欲望を最大限に満足させようとするものでありましょうが、その欲望を空の思想によって反省させ、人間を欲望人としてではなく精神人として再生させ、人間に利他の徳を教えることは、現代文明にとって真に重要なことであると思います。」¹⁷

お遍路で学ぶ仏教の教えは実にシンプルなものであるが、現代人が実生活において必要とする生きるための具体的指針を豊かに提供している。人間の心が低いレベルからより上のレベルに上昇していくためには、罪を懺悔し、自己改革し、神仏の力を得て再生していく必要がある。お遍路とはそのような再生をめざすものであることは、衛門三郎伝説に表現されているとおりである。再生の過程においては、自分の罪がどのような種類の罪なのか、それを克服するのに何が必要かなど、概念的思考は必要である。そのようなプロセスを導くのが仏教の教えということになる。

(4) 神道

次に取り上げるべきは、お遍路の構成要素のひとつとしての神道である。「神道」は、定義が困難といわれるほど広い意味内容を含んだことばであるが、お遍路との関連においては、札所としての神社、そしてそれに関連して日本人の自然観が問題になる。

まずは神社についてであるが、神仏分離で小豆島八十八カ所から外れた神社系の札所をあげてみよう。第 10 番亀甲八幡宮、その別当寺である第 9 番八幡寺、第 35 番宝亀山八幡宮、その別当寺である第 34 番保壽寺、第 52 番八幡宮、その別当寺である第 51 番宝幢坊、第 59 番天満宮、第 63 番大木戸八幡宮、第 66 番伊喜末八幡宮、その別当寺第 67 番瑞雲寺、第 71 番滝ノ宮、第 85 番福田八幡宮、その別当寺である第 83 番神宮寺。以上 13 の札所である。

これらのうち、11 の札所は、6 つの八幡宮とその別当寺である。これらに天満宮と滝之宮が加わる。八幡宮の祭神は応神天皇（品陀和気命）、神功皇后（息長足姫命）、姫太神（仲姫命）である。天満宮の祭神は菅原道真公、滝ノ宮の祭神は牛頭天王である。八幡宮の本地仏は、亀甲八幡宮の愛染明王、福田八幡宮の弁財天を除いてすべて阿弥陀如来である。これらの神社と別当寺にあった本尊は、すべて別の堂庵などに移され、現在も巡拝の対象になっている。したがって、神仏分離でお遍路さんの礼拝の対象から外れたものは、神社とその祭神ということになる。ただ祭神についていうと、実際には、神社はどこも一柱だけの祭神ではない。本社があり摂社・末社があり、いろいろな神を祀っている。たとえば、宝亀山八幡宮をとっても、江戸時代から、八幡宮本社の他に、住吉社、高良社、祇園社、金毘羅祠を祀っている。また、これらの祭神のみならず、シンパクなどの巨木にも注連縄が張られている。神社では、いわば八百万の神が祀られてきたのである。

お遍路において神社系の札所が排除されたことの意味は、祭神より、むしろ神社という場所そのもの、すなわち神社のもつたたずまい、神社に残された自然を味わう機会がなく

¹⁷ 梅原猛 (1991) 178 ページ。

なったところにあるのではないかと思う。この場合の神道は、国家によって権威づけられた神道ではなく、原神道、原始神道と呼ぶべきものである。かつて、神社合祀によって身近な神社がなくなっていくことに反対した南方熊楠が評価するのも、「何事のおはしますかを知らねども有難さにぞ涙こぼるる」もの、「言語理屈で人を説き伏せる教えにあら」ざるものとしての神道であり、原始神道と呼ぶべきものである。¹⁸

梅原猛氏は「縄文の宗教」と呼んでいるが、彼によると、原始神道の特徴は木の崇拝と祖先崇拝の二つだという。すなわち、まず第一に、「生きとし生けるものはみんな平等であり、同じ生命である」¹⁹という考え方があった。そして、その生命を象徴するのが木である。したがって、日本人の信仰の基本は木の崇拝である。第二に、「死んでも必ず再生してくるといふ、生死の循環の考え方」があった。これが祖先崇拝・死者供養につながっている。この二つの考え方は、現代の日本人の根底にも根強くあるという。

木への信仰ゆえに、原始的な神道においては、森そのものが聖所であり神社であった。日本人にとって、神社は木を切ってはならない場所であったから、現在でも、神社には太古の森が残されているのである。小豆島においては、旧札所であった亀甲八幡宮、伊喜末八幡宮、福田八幡宮などの社叢は、県や町の天然記念物に指定されている。たとえ指定されていなくても、どこの神社も緑が豊かである。

われわれは、神社の森に入ったときに何を感じるだろうか。神秘、爽快感、癒し、落ち着き、自由、浄化、などの感覚であろう。そして、神社に残る巨木には特別の聖なる力が宿っているように感じられる。近代文明は、人間が自然を支配することをよしとするが、神道は自然との共存をはかる思想である。自然との接し方にもいろいろなスタイルがあるが、ここでは、宮家準氏の整理にならって、神道は山のふもとで拝むこと、静かに座って祈ることと特徴づけておきたい。²⁰

(5) 修験道

神道も仏教も、静かに座って祈るあるいは瞑想する宗教であり、いわば「静」の宗教である。これに対し、修験道は神道、仏教の両方の流れを汲みながらも、峰々を歩く抖擻(とそう)やその他の行をもつ「動」の宗教である。小豆島は、太古の火山活動とその後の浸食作用でできた島であり、標高 800 メートルを超える山があり、断崖絶壁、多数の洞窟があつて、修験道の行場には事欠かなかつた。『内海町史』によると、近世初期、第 21 番札所清見寺の近くに玉泉院と玉蔵院という二つの山伏寺があり、小豆島の「山伏頭」として全島の山伏の中心的存在であつたという。²¹これらの山伏寺は、平地にある寺であつたが、おそらくここを根拠地にして山の行場で修行が行われていたのであろう。

¹⁸ 南方熊楠 (1971)、550～551 ページ。

¹⁹ 梅原 (1991)、54 ページ。

²⁰ 神道文化会 (2009)、122 ページ参照。

²¹ 香川県小豆郡内海町 (1974) 319 ページ。

現在、小豆島遍路の山岳霊場・山岳奥院が 14 ヶ所あるが、これらは古くは修験道の行場だったようである。これらの霊場には、通常、お遍路では行かない危険な場所があって、現在でもそこで修行する行者さんがいるという。役ノ行者を祀っているところも多い。また現在でも、毎年、いくつかの霊場では柴燈護摩の行事が行われ、多くの信者を集めている。お遍路さんは行者ではないので、修験道の修行をして霊験を身につけるわけではないが、山道を歩くという意味では、お遍路も抖擻に近い行為を行っているといえよう。

小豆島の山岳霊場は、小豆島遍路でもっとも神秘的な場所、非日常的体験をする場所である。まず、山の中に天然の岩屋・洞窟があること自体、人々に神秘的感情を呼び起こす。そこにたどり着くには、笠ヶ滝のように、急な岩の斜面を、ときには鎖を頼りにしながら登らなくてはならない。暗い洞窟に入ると、ろうそくの火に照らされて、ぼんやりと本尊の不動明王や薬師如来が見える。礼拝が始まると、読経の音が洞内に響きわたる。護摩木がパチパチと音を立てて燃え上がる。これによって煩惱罪障が焼き尽くされるのだという。いかにも霊験あらたかといった雰囲気がある。小豆島遍路の魅力は、山岳霊場にあるというお遍路さんはまことに多い。

洞窟内での護摩祈祷は、煩惱罪障を焼き尽くすというのだから、お遍路さんにとっては、胎内くぐりと同様に、死と再生を疑似体験する意味があるのではないだろうか。また、再生とは古い自己との戦いであり、苦行を伴うのが通例である。修行が求められる。その点、山岳霊場は、もともと修験道の行場であり、標高 2~300 メートルの高さにあるので、歩いて登るだけでも修行になる。いくつかの行場を訪ねれば、山に登ったり降りたり、けっこうな難行苦行である。行場には、岩場があり、断崖絶壁がある。山岳霊場が教えるのは、人生の厳しさ、「人生とは修行なり」ということであろう。

(6) 小括

以上、古式小豆島遍路の構成要素として、太古的霊性、仏教、神道、修験道と見てきたわけだが、それでは、小豆島遍路から神道が消滅したことの意味は何だろうか。遍路から神道的要素が排除されたとは、要するに、自然がもっとも豊かに残っている場所に行かなくなったということである。もちろん山岳霊場には自然が残っているが、山岳霊場の自然は岩が中心で、険しい表情の場所が多い。それとは違う表情の自然、樹齢何百年という木々が林立するような癒しの場所が神社であるが、そういう場所に行かなくなったということである。お遍路はいろいろな要素で成り立っており、それぞれの要素がそれぞれの作用で人間の再生を促している。仏教は人生哲学や、十善戒のような実践すべき戒律を与える。修験道の行場は、人生の厳しさ、修行の大切さを教える。神社の大木は、何百年という悠久のいのちそのものである。神社の森に入ると心が浄化され、癒される。里の神社は、基本的には慰安・癒しの場所といえよう。このように、神道的要素は、癒しを与えるものであるから、神仏分離によって神道的要素が排除されたことは、遍路から癒しの力が削り取られたということではないだろうか。

3. 古式小豆島遍路を歩く

これまで、神仏分離で神社系の霊場が廃止されたことの意味を考えてみたが、次に、実際に神仏分離以前の小豆島遍路を歩いてみて、上述の議論を検証してみたいと思う。以下、その検証結果を記す。なお、筆者は、これまで小豆島遍路の通し打ちを1回、区切り打ちを5~6回行っている。今回のお遍路は、2011年の11月~2012年1月にかけて、一泊、または日帰りで歩いた。小豆島の神社を含めて巡ったのは、今回が初めてである。

(1) 第1番~第11番霊場

小豆島遍路を始めるためには、まず船に乗って島に渡らなくてはならない。小豆島遍路は、船に乗って海を渡るところから始まる。そして海を渡るとは、お遍路さんにとっては、非日常的世界に移動する儀式になっているといえる。日常の煩悩の世界から、彼岸に渡るのである。お遍路さんにとって、小豆島は聖なる島である。

もし坂手港に降り立ったとすると、第1番から順に第11番まで打ってもそれほど支障はないであろう。しかし今回、筆者は草壁港から歩きはじめたので、第1番から始めるというのは都合が悪い。そこでまず、港にもっとも近い旧第10番札所の内海八幡宮に参拝し、9→8→7→2→1→3 奥院→3→4→5→6→10→11の順で巡拝した。草壁からだ、これがもっともロスの少ないルートである。

内海八幡宮は、現在は遍路の札所ではないが、かつては小豆島遍路第10番札所だった。神仏分離によって、本地仏の愛染明王は、1キロほど離れた現在の第10番札所西照庵に移された。『小豆嶋名所圖會』には、この八幡宮は第10番札所と記され、八幡大神が説明されているだけで、特別の記述はない。江戸時代のお遍路さんはここに来て何を感じたのだろうかと思像してみる。

内海八幡宮は亀甲山八幡宮とも呼ばれるように、亀の甲羅のような小高い山で、社殿のあるところは標高約40メートルである。山全体が鬱蒼たる森になっている。この森は、生態学上貴重なウバメガシ型の社叢という理由で、県の天然記念物に指定されている。注連縄を張った大きなシンパクの木も見られる。森の中の石段を登って行くと、社殿のある敷地が広がる。敷地の周囲には樹木が茂っていて、眺望はない。お遍路で来る神社は森(杜)なのだと、実際に神社を訪れてあらためてそう感じる。

江戸時代のお遍路さんは、神社でどのような礼拝を行ったのであろうか。真念の『四国遍路道指南』によると、般若心経についての言及はないので、小豆島でも般若心経は唱えなかったのであろう。そのかわり、ご詠歌を唱えると書かれているので、ここでもおそらく「末遠くかけてぞ仰ぐ石清水 ながれ絶せぬ神の恵を」のご詠歌が唱えられたのであろう。

この八幡宮の下に、かつては別当寺の八幡寺があり、そこが第9番札所だったが、神仏分離で廃止されて今はない。現在では、その八幡寺の御本尊不動明王は、少し離れた庚申堂に祀られている。庚申堂を訪れ、さらに第8番常光寺、第7番向庵の順で参拝する。筆

者が訪れた 2011 年 11 月 13 日は、第 2 番札所碁石山で柴燈護摩供が行われる日だった。碁石山を管理している第 8 番札所常光寺は、大勢の信者さんでにぎわっていた。男子小学生たちは、りりしい山伏姿で、兜巾、結袈裟を着けている。山岳霊場の碁石山に登ると、山伏姿の行者が柴燈護摩の準備をしていた。このような儀式をまのあたりにすると、小豆島における修験道の影響の大きさを実感する。柴燈護摩供は、現在、碁石山の他、清滝山、長勝寺、笠ヶ滝、清見寺などで行われている。

『小豆嶋名所圖會』は、山岳霊場の第 1 番札所洞雲山と第 2 番札所碁石山を大きく扱っている。それだけ小豆島を代表する名所と見なしていたのであろう。洞雲山、碁石山は、今も昔と変わらぬ森である。岩肌がむき出しになった断崖絶壁があり、山伏の修行の場であった。洞雲山について、「毘沙門堂は広さ三丈、深さ八丈許の巖洞石窟の中に構う。闐寥として座禅観法の名場なり」と書かれている。²²現在も神秘的な雰囲気漂う石窟である。現在の碁石山も、『小豆嶋名所圖會』に描かれた絵とさほど大きな違いがない。ただし、現在本堂になっている洞窟は、入り口に大きな建物が建てられていて、暗い洞窟になっているが、江戸時代はこの建物がないので、光が差し込んでいたのではないかと思われる。

碁石山からの眺望はすばらしい。また、洞雲山からさらに南に山道を歩くと播磨灘を望む展望台があるが、ここからの眺望もさぬき十景に選ばれた絶景である。そしてさらに東に進んだ第 3 番奥院隼山からの眺望もすばらしい。『小豆嶋名所圖會』には、隼山について「堂前より海上眺望よし」と書かれている。「殊更晩春の頃は、階下の桜花爛熳たる光景また類なし。且境内より向ふを望めば、烟波渺茫として、海舶の白帆は飛花と疑れ、海士の釣舟は落葉に似たり。・・・阿波の山々より讃岐の峯々列りて、山水の美観言語に絶せり。されば当山の勝地なることは、遠近に聞こへて其名高し」。²³このあたりは、標高約 250 メートルから瀬戸内海のパノラマ景を見ることができる場所である。今も、碁石山、洞雲山、隼山から望む瀬戸内海の風景は、みごとというほかない。遍路にはこういう楽しみも昔からあったということは注意しておくべきだろう。

²² 暁、431 ページ。

²³ 暁、439～440 ページ。



図 7 洞雲山付近の展望台からの眺望

隼山から車道を下って行くと坂手の第 3 番札所観音寺に至る。『名所圖會』には、「当寺境内より眺望すれば、坂手の浦直下にありて、海上渺々たる風景すこぶる美観なり」と書かれている。ここは海拔 20 メートルほどの場所である。現在は、埋め立てられ海岸線がやや海に伸びているが、かつてはのどかな浦の風景であったのだろう。

観音寺のすぐ近くに大樹が林立する鎮守の森があった。荒神社で、社叢は内海町指定天然記念物という表示があった。お遍路で神社に参拝していた時代の人は、おそらく、札所ではないこのような神社にも自然に頭を下げたのではないかと思う。それは、今日のお遍路さんが遍路道沿いのお地藏さんを拝むのと同じだと思ふのである。

坂手から一山越えると第 4 番古江庵である。現在は内海湾の美しい浜辺にあるが、『小豆嶋名所圖會』には、「古江村山の半腹にあり」と書かれているので、庵の場所が変わった。古江から田ノ浦の二十四の瞳映画村まで、現在は、海辺の立派な県道があり、お遍路さんもこの道を歩く。大型の観光バスに何台も追い越されながら、車道を 30 分ほど歩くと難なく第 5 番堀越庵に着く。しかし、江戸時代は悪路だったらしい。『小豆嶋名所圖會』には「山路にして頗る難処多し」と書かれている。大正時代にお遍路をした荻原井泉水は、古江から堀越庵まで舟に乗っている。井泉水によると、当時は歩く人もあり、舟に乗る人もあったという。時間は同じぐらいだと彼は書いている。江戸時代も舟を雇う人が多かったのであろう。

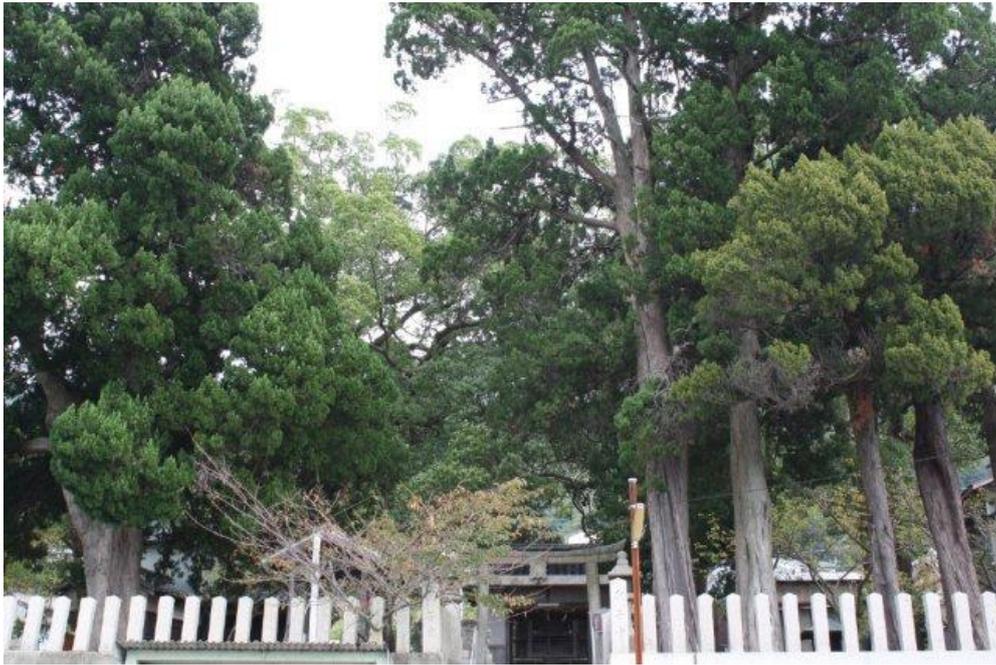


図8 坂手荒神社の社叢

堀越庵から第6番田ノ浦庵へは、先述のとおり、今では海辺の平坦な車道があるが、今回は山越えの遍路道に行く。馬も立つほどの急坂に由来する馬立峠を越えて田ノ浦庵に至る。この道も、『小豆嶋名所圖會』に「山路いたって険しく、難所多し」と書かれている。海拔150メートル程度の峠なので、やや誇張的表現のようにも感じられるが、それは筆者が登山靴をはいて歩いているからだだろうか。草鞋で岩のごろごろした道を歩いた時代はつらかったのだろうと思う。現在は、木立の中の道であり、眺望はほとんどない。田ノ浦庵参拝後は、アスファルトの県道に戻ることにした。昭和初期の写真には、田ノ浦港から舟に乗るお遍路さんたちの様子が写っている。(図3) 岬の札所は打ち戻りになるし、悪路なので、片道は舟を雇うといったことも古くから行われていたであろう。

田ノ浦から古江、苗羽(のうま)、馬木と県道をたどり、第11番馬木の観音堂を打って、この日のお遍路は終わる。

(2) 第12番～第23番霊場

第12番札所からは、札所の順番にしたがって巡拝する。この日は、最初に第12番札所岡ノ坊、続いて第13番札所栄光寺を打った。そこから山道に入り、小一時間登ると、第14番札所清瀧山に着く。本堂にいたる急な長い石段、境内に林立する大木、その背後のむき出しの岩山が目に入る。荒々しい風景である。ここは標高500メートル、栄光寺の奥院で、修験の道場であった。昔から霊験譚に事欠かない霊場だと説明書きに書かれている。『小豆嶋名所圖會』に描かれている不動明王を祀った降魔窟、地藏菩薩を安置した大慈窟は、現在では立派な建物に覆われており、中に入っても岩窟に入ったという印象はあまり

ない。『小豆嶋名所圖會』には降魔窟の前に「数間の梯子を架く」と書かれており、江戸時代は梯子をよじのぼって参拝したようである。

また、現在では、清瀧山の目の前をブルーラインという寒霞溪山頂へ向かう大きな車道が通るようになり、駐車場もできて、車で参拝する人には便利になった。この道路がなかった時代を想像すると、昔はまことに閑寂な地であったにちがいない。

現在の歩き遍路のコースは、清瀧山からブルーラインを西に向かって歩き、第 20 番仏ヶ瀧、第 18 番石門洞を打つのが一般的である。しかし、ブルーラインは昭和 45 年に建設された新しい車道だし、そもそも、江戸時代は、これらの霊場は札所ではなかった。そこで今回は、江戸時代のお遍路さん同様、清瀧山参拝後は、登った道をそのまま安田まで下ることにした。

札所の変遷であるが、明治以降に、旧第 18 番札所東山庵から現在の石門洞に本尊の地藏菩薩が移されている。また、下村の旧第 20 番札所下之薬師堂の薬師瑠璃光如来が、現在の仏ヶ瀧に移されている。

安田に戻って、第 15 番札所大師堂を参拝し、第 16 番札所極楽寺に向かう。林の中の古い遍路道を抜けると極楽寺に着く。この日は月曜日のためか、参拝者がなく、納経所でご住職が、小豆島遍路の現状・将来像などについて時間をかけて話して下さった。小豆島遍路の長所のひとつに、このようにお遍路さんと住職との距離が近いことがしばしば挙げられる。本四国ではほとんどないことである。「親しみやすさ」が小豆島遍路の特徴である。

極楽寺から 10 分ほど歩くと一ノ谷庵に着く。お遍路さんへのお接待のお茶が用意してある。手入れのよくゆきとどいた庵である。江戸時代末期は「庵室の庭前に大樹の桜あり。枝四面にはびこりて、無双の美観なり」という様子だったが、もちろん今はない。

ここから 10 分ほどで第 19 番木下庵があり、その近くに第 21 番清見寺がある。第 22 番峯山庵、第 23 番本堂も近い。江戸時代には、第 18 番東山庵も、第 20 番下之薬師堂もこのあたりにあった。500 メートル四方ぐらいのところに、18 番、19 番、20 番、21 番、22 番、23 番の札所があったのだから、このあたりは札所の密集地帯だった。

『小豆嶋名所圖會』によると、現在の第 19 番木下庵は、江戸時代は上之薬師堂と呼ばれていた。また、大正 3 年出版の『讃岐國小豆島實測量改正旅行案内地圖』の表記を見ると、第 20 番札所と 21 番札所がともに清見寺の中に記されている。第 20 番札所が清見寺内に移されていた時代があったようである。

前述のとおり、『内海町史』によると、近世初期、清見寺の近くに玉泉院と玉蔵院という二つの山伏寺があり、「当島山伏頭」として全島の山伏の中心的存在であったという。清見寺は里のお寺であるから、一見したところ修験道との関連は見えにくいですが、現在の清見寺でも、毎年 3 月に「大柴燈護摩火生三昧供」の大祭が行われている。

第 22 番峯山庵と第 23 番本堂は、草壁の町の裏山にある。現在、これらの丘から南を望むと、草壁の家並みが見え、そのずっと先に内海湾、そのむこうに田ノ浦半島の山が見える。のどかな風景である。

小豆島遍路では当然のことながらよく海を見る。起伏の多い小豆島遍路は、いろいろな高さから瀬戸内海を眺める旅ともいえるのではないだろうか。田ノ浦半島を歩くときはまさに波打ち際を歩く。ここ峯山庵や本堂は海拔十数メートルの高さである。碁石山や洞雲山は海拔 250~300 メートル。そして寒霞溪の入り口の清瀧山は海拔 500 メートル。どの場所から瀬戸内海を見ても感動するが、高さが異なると海の印象も変わってくる。

波打ち際から見る海は、自分がそこに歩いて行けない場所、この世とは違う世界である。海の向こうに常世、補陀落浄土があると想像した昔の人々の気持ちがそれとなく理解できる。海拔十数メートルの高さから見る風景は、のどかな浦の風景である。間近に見えるのは家並の屋根の重なりである。その一軒一軒に人々の日々の暮らしがある。その先には穏やかな海が広がっている。まことに平和な世界である。200~300 メートルの高さになると、自分がそこにいた町や海辺は小さくなってしまい、あたかも盆栽かおもちゃのように見える。自分が巨人になったかのようなのである。この高さからは、もう人々の暮らしを感じることはできない。むしろ、少し登っただけで世俗の世界から離れてしまったことに驚きを感じる。清瀧山や寒霞溪のように海拔 500~600 メートルだと、いっそう超越的世界にいると感じられる。海を眺めても体感しているのは空である。海からの高さは、そのまま世俗の世界との心理的距離ではないだろうか。山には、海の向こうの別世界とはまた違った神の世界があるように感じられる。山の上が聖地になり、祠がつくられているのは、ごく自然なことだと思う。

『小豆嶋名所圖會』の絵によると、昔は峯山庵と本堂のすぐ下が家並みで、その先は塩田のある浜辺だった。現在国道が走っているところは、かつては海だった。草壁の町は埋め立てでかなり広がった。江戸時代は、海はずっと現在の陸地にまで入り込んでいたのである。今回のお遍路は第 23 番で終了。

(3) 第 24 番～第 34 番霊場

再び草壁港に来る。しかし今回は前回とは逆に、そこから国道を西に向かう。清水というところで旧道に入る。道しるべに従って歩いて行くと巨木が密生している場所があった。日方の神社である。立て札には、「西村高木明神社社叢、内海町指定天然記念物」とあった。しばし巨木を眺める。

第 24 番札所安養寺はその神社の近くにある。本尊如意輪観音。日方の名は干潟に由来するらしい。『小豆嶋名所圖會』によると、かつてこのあたり一帯は、西村梅林と呼ばれ、内海十勝の一つだった。「清水・日方の間、一円に梅林にして、如月花の盛には清香馥郁として、沖ゆく船も賞美せざるはなし」と書かれている。²⁴現在は、みかん畑とオリーブ畑

²⁴ 暁、477 ページ。

になっており、梅はほとんどない。古い道を歩いて行くと、第 25 番誓願寺庵があり、お水の大師がある。さらに第 27 番桜の庵と第 26 番阿弥陀寺がある。いずれも里のお寺、堂庵である。桜の庵は、江戸時代は観音堂と呼ばれていた。このあたりで、ようやく数本の梅の老木を見つけた。西村梅林のなごりはそれだけだった。それ以外は、みかん畑かオリーブ畑、竹林になっている。

阿弥陀寺を打つと、いったん国道に出る。しばらく西に歩いて、西村水木のオリーブ園のあたりから三都半島への道に入る。第 28 番札所薬師堂へは、この海沿いの県道を歩いていけばよいが、今回は途中から半島の中央部を通る旧遍路道に入る。見晴らしはよく、内海湾が美しい。この遍路道が県道 250 号線に合流する地点に、旧第 28 番札所薬師堂跡がある。かつて蒲野の薬師堂はここにあった。ただ、現在は 500 メートルほど離れた海辺の場所に移転している。蒲野への道は、現在は立派だが、昔はよくなかった。『小豆嶋名所圖會』には「山路にして難所多し」と書かれている。荻原井泉水の小豆島遍路では、水木から蒲野の間は舟を利用している。

旧第 28 番札所があったあたりから、半島を横断する徒歩専用の山道に入る。曇り空ということもあってか、ここは昼なお暗いウバメガシの森である。薄暗い山道が延々と続くと、だんだん現実感覚がなくなってくる。歩いても、歩いても、同じウバメガシの中の景色である。夢なのか現実なのか。自分が自然の中に溶けこんだかのような感覚を味わう。空海の「六大無碍にして常に瑜伽なり」とはこういう状態だろうか。そのような少し神秘的な雰囲気漂うこの山道で、その昔、弘法大師に出会ったという人がいる。小西庄助翁という人物で、現在はその出会いの場所に「修行大師と御出合の霊跡」という石碑が建てられている。石碑が建てられる以前は庵が建てられていたそうである。石碑の裏には「奥丹大師会建立、昭和 60 年 10 月吉日」と彫られているので、この会の先達さんだったのであろう。このような石碑が建つということは、小西氏にとって大師との出会いがよほど確かな現実と感じられたのであろう。

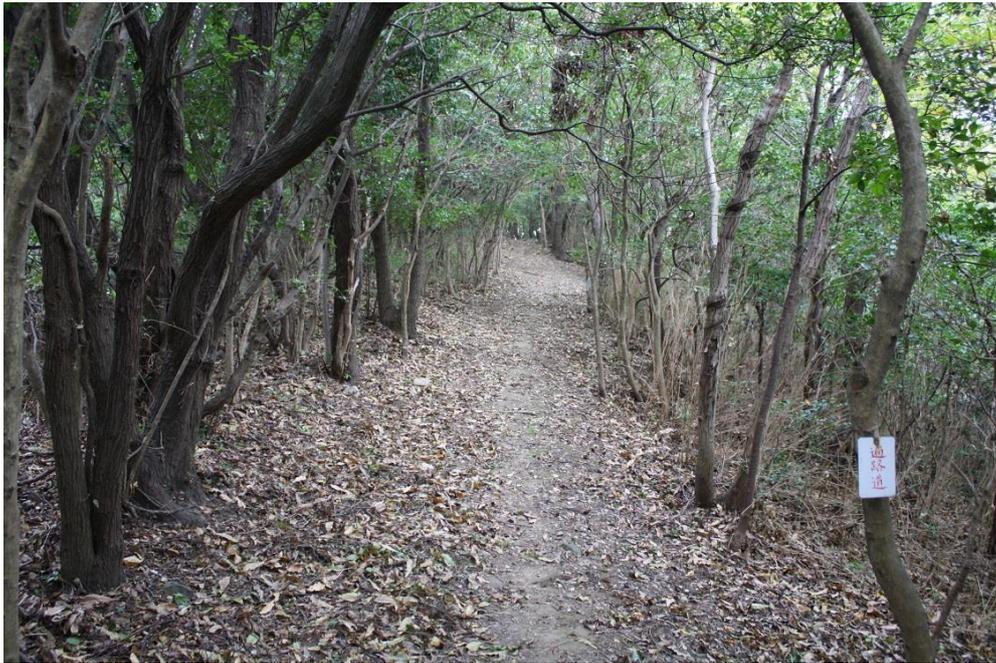


図9 ウバメガシの森の中の遍路道

ウバメガシの森を抜けるとやがて第 29 番札所風穴庵に着く。江戸時代は風穴権現社と称していた。本地仏が地藏菩薩であった。この庵のあるところは、海拔 100 メートルであるが、岩山に海につながる空洞があって、岩のすきまから海風が吹き出して塩が付着している。不思議な場所である。駿州富士山にも同様の風穴があるというので、この地は富士と命名されている。ここからの眺望は今もよい。『小豆嶋名所圖會』では次のように紹介されている。「此草庵の庭前より眺望は、滄海漫々として、眼下には神の浦・弁天嶋・白浜・釈迦が端向ふに突出、はるかには狭貫の山々列なり、就中八栗の五剣山・屋嶋・志度の浦より、女木嶋・男木嶋、その余許多の小嶋、景色絶勝にして美観なり」。²⁵ここで弁天嶋というのは、現在の権現崎のことである。今はここに皇子神社がある。植物の宝庫であり、この岬全体が国指定天然記念物になっている。

風穴庵から正法寺を経て第 31 番札所誓願寺へは、海沿いに県道 250 号線をたどる。途中、吉野崎あたりの広大な海の景色はすばらしい。吉野崎を越えると二面（ふたおもて）という町で、そこに第 31 番札所誓願寺がある。誓願寺の前には田んぼが広がっているが、江戸時代は塩田だった。誓願寺には、国指定天然記念物の巨大な蘇鉄がある。江戸時代にもあったはずだが、なぜか『小豆嶋名所圖會』には言及がない。ここから 1 キロほど歩くと第 32 番札所愛染寺である。ここには樹齢 900 年といわれるシンパクがある。宝生院のシンパクには及ばないが、このシンパクも立派である。小豆島の霊場にはまことにシンパクの巨木が多い。

第 32 番愛染寺の次は、第 34 番保壽寺庵を経て、第 33 番長勝寺を打つことになる。巡

²⁵ 暁 484 ページ。

拝の順番が入れ替わったのには理由がある。長勝寺の近くに池田の宝亀山八幡宮があるが、神仏分離以前は、この八幡宮が小豆島遍路第 35 番札所だった。そして江戸時代は、そのすぐ下に別当寺の保壽寺があつて、これが第 34 番札所だった。神仏分離で保壽寺は廃され、少し離れた場所に保壽寺庵が建てられ、これが第 34 番札所として現在に至っている。また、宝亀山幡宮も札所ではなくなり、第 35 番札所は現在の林庵に移された。八幡宮の本地仏は、現在では長勝寺に納められている。その神仏習合の仏像三体は国の重要文化財である。

今回は、長勝寺を参拝した後、かつての第 35 番札所だった宝亀山八幡宮に行ってみた。ここは今も『小豆嶋名所圖會』の絵とほとんど変わらない。神社を取り囲んでいるのは鬱蒼たる鎮守の森である。両側に大きな木が立ち並ぶ参道を登って行くと隨身門があり、そこをくぐると草一つない裸の地面が広がっている。その広場の奥に社殿があつた。社殿の右手には、注連縄を張ったシンパクがある。密生する大きな木、開けた空間、そして社殿。この八幡宮の風景も単純明快ですがすがしい。この八幡宮も昔から鎮守の森で、神が鎮座する癒しの空間だった。江戸時代のお遍路さんが享受したこのような癒しの空間を、今日のお遍路さんが享受できないのは、まことにもったいないことのように感じられた。今回のお遍路は、この宝亀山八幡宮で打ち止めにした。

(4) 第 35 番～第 55 番霊場

今回は、池田港を出発し、中山を経て土庄へ至るやや長距離の遍路である。巡拝の順番は、40→41→42→35→39→38→36→37→43→45→44→47→48→46→74→49→50→51→52→54→55→56 となる。第 53 番本覚寺は、かつて第 54 番宝生院の隣にあつたが、火事で焼け、現在は湊崎に移っているので、今回のお遍路のコースに含まれない。これとは反対に、番号が飛ぶが、第 74 番札所の円満寺がこのルートに含まれる。

最初に第 40 番保安寺を打ち、そこから急な山道を登って第 41 番札所仏谷山に至る。この岩窟内の霊場には住職が常駐され、ほとんどいつでも護摩祈祷が体験できる。『小豆嶋名所圖會』によると、かつては窟内に病者のための蒸風呂があつた。本尊は薬師如来。ここからの眺望はすばらしい。しかし、次の第 42 番西ノ瀧からの見晴らしはそれをしのぐ。小豆島遍路では、西ノ瀧からの景色が一番という人が多い。『小豆嶋名所圖會』の記述を見よう。寺伝として次のように紹介する。「淡路嶋・阿波の鳴戸東に浮ひ、讃岐の志度・屋嶋・八栗の嶽・鹽飽の浦・金毘羅の山・備前の兒嶋、西南の見ものをつくす。滄海渺茫として萬里の天をひたし、往來の船、鳥とひ、木の葉ちる。夜ふけひとしつまりて、龍燈しはしは現す。煮鹽のけふりななめになひき、負薪の歌ひゝきすさましく、鋤を荷ふ農夫、竹をたく漁翁、朝のひかり、夕のかすみ、百千の景象たゞ一望の中におさむ。」²⁶煮鹽の煙や負薪や鋤を荷う農夫などの光景は、今では見られないとしても、ここに描かれた広々と

²⁶ 暁 496～497 ページ。



図 10 西ノ瀧からの眺望

した眺望は決して誇張ではない。ここからの風景は今も昔もほとんど変わらないようだ。

ここから山道を下って、第 35 番林庵、第 39 番松風庵、第 38 番光明寺と打ち、二つの札所が並んでいる第 36 番釈迦堂、第 37 番明王寺に至る。第 36 番釈迦堂は、『小豆嶋名所圖會』には、高寶寺として出てくる。明王寺の住職によると、かつては、ここには明王寺より大きな寺があったそうである。今は寺なく、国の重要文化財に指定されている釈迦堂だけが残っている。小豆島で国の重要文化財になっているのは、長勝寺の八幡宮本地仏と釈迦堂のみであり、貴重なものである。

池田の里の寺院・堂庵を打った後は、中山への道を登って行く。昔は細い山道だったであろうが、今は大きな舗装道路である。峠を越えて少し下ったところに第 43 番浄土寺がある。現在は、第 45 番地藏寺堂も同じ境内にある。地藏寺堂は、かつては地藏寺として一寺を構えていたが、廃止され、浄土寺に本尊が移された。浄土寺からさらに山道を登って行くと第 44 番湯船山がある。『小豆嶋名所圖會』には湯船山蓮華寺として紹介されている。その絵を見ると、行者堂があり、王子権現があり、修験道の影響の強い寺だったことが明瞭に示されている。標高 400 メートルの地にあり、社叢は県の天然記念物に指定されるほど豊かである。境内には日本の名水百選に選ばれた泉があり、その下の中山千枚田を潤している。今は無住のお寺で訪れる人も少なく、幽玄の趣のある名所である。



図 11 宝生院のシンパク

ここから山道を下りながら、第 47 番梅尾山、第 48 番毘沙門堂を巡拝し、肥土山の第 46 番多聞寺に至る。多聞寺から第 49 番東林庵に行く途中に、第 74 番円満寺があるのでここも参拝する。この寺のシンパクの巨木は土庄町の天然記念物に指定されている。次の第 49 番札所は、江戸時代は、萬願寺であった。『小豆嶋名所圖會』には「當時大に廢して、僅の草庵存す。」と記しているので、江戸末期には消滅寸前の状態だったようである。その残った草庵が東林庵となったのであろう。

第 50 番遊苦庵（旧薬師堂）を経て、第 54 番宝生院に至る。第 51 番宝幢坊、第 52 番旧八幡宮も同所にある。宝生院の名物は、シンパクの巨木である。『小豆嶋名所圖會』には、「寺境に檜柏の大木あり」とだけ書かれている。このシンパクは日本最大といわれ、国指定の特別天然記念物である。巨樹というが、一本の木でほとんど森というべきである。筆者は、昔、屋久島に登り縄文杉を見たことがあるが、それと同等のインパクトがあるように感じられる。これまで小豆島遍路でたくさんのシンパクの巨木を見てきたが、それらとは次元の異なる巨木である。

宝生院から、第 55 番観音堂、第 56 番行者堂に向かうのが通常のお遍路コースであるが、江戸時代のお遍路を体験する今回は旧第 52 番富丘八幡宮に向かった。八幡宮の鳥居に着くと、傍らに、「富丘八幡神社」「国立公園八幡山」「讃岐十景」の三つの石碑が建っていた。鳥居をくぐり、参道を抜けると馬場があり、その奥まったところに栈敷がある。栈敷の上は緑の森になっている。山頂から向こう側、東の尾根づたいに多数の古墳があり、富丘古



図 12 富丘八幡宮からの眺望

墳群として知られている。栈敷の中を上って行くと左手に社殿に至る石段があった。その石段から眺める海は絶景であった。讃岐十景に選ばれ、映画のロケ地にもなった理由がよくわかった。江戸時代のお遍路さんは、こんなにすばらしい風景を見ることができたのである。この八幡宮と別当寺の宝幢坊が札所からはずされ、宝生院に旧八幡宮、宝幢坊として移されてしまったことは、やはり残念というべきではないか。今回のお遍路はここまで。十分歩いたので、観音堂、行者堂は省略させてもらった。

(5) 第 58 番～第 64 番霊場

このコースは、小豆島を牛に見たてたときの頭の部分、すなわち前島一周の短いコースである。巡拝の順番は、霊場会総本院、64→58→58 奥院→59→60→61→62→63 である。

今回は、土庄の霊場会総本院から始めることにした。総本院を出ると、すぐ近くの第 64 番札所松風庵に行くのがふつうの巡拝コースである。しかし、松風庵は神仏分離でつくられた札所である。そこで、江戸時代のお遍路体験を目的とする今回のお遍路ではここに行かず、旧第 59 番天満宮に行くことにした。今回初めて気づいたのであるが、松風庵の入り口と旧第 59 番札所天満宮の入り口は同じである。天満宮の鳥居の直前で左折し、石段を上って行くと松風庵である。鳥居をくぐって、まっすぐ石段を上って行くと天満宮である。

天満宮が遍路の札所というのは、少し意外な感じがする。『小豆嶋名所圖會』には、「本社天満大自在天神 草庵本社石階下にあり。宮守の僧こゝに住す。地藏菩薩を安ず。」と書

かれています。²⁷この神社は、小豆島各地の八幡宮と比べるとやや規模が小さい。現在では訪れる人が少ないのか、石段も本社も老朽化していた。社殿のとなりに建物があって、裏口らしきものが見えたので、細い道をたどって反対側に出てみると、そこに現在の第 64 番札所松風庵があったので驚いた。天満宮と松風庵は、実は、隣り合って建っているのであるが、参拝者にはそれと分からないように、巧みに区切られていたのだった。筆者は、松風庵に何度となく訪れているのであるが、隣が天満宮だとはまったく知らなかった。松風庵の本尊は地藏菩薩である。神仏分離で天満宮の地藏菩薩を移す必要が出てきたとき、天満宮のすぐ隣に新たに庵をつくって安置したのであろう。『小豆嶋名所圖會』の絵を見ると、天満宮は愛宕山のふもとに、木々に囲まれて鎮座しているが、社殿以外は描かれていないので、松風庵は明治以降の建物であることがわかる。

天満宮、松風庵を後にして、第 58 番西光寺に向かう。西光寺は前島にある堂庵すべてを管理するお寺である。現在は 8 ヶ所の納経をすべてここでやっている。次の第 59 番は甘露庵であるが、江戸時代は第 60 番札所で鹿嶋庵という名称だった。旧第 59 番の天満宮が廃止になって第 64 番松風庵になったので、順番がひとつずつずれたようだ。現在の第 60 番江洞窟も、かつては第 61 番だった。柳の港から江洞窟への道は、現在では、セメントで固められているが、そうなる前は、風が強い日は波しぶきを浴びる岩々をつないで歩く道であった。古い写真を見ると、いかにも海の修験の道場という趣がある。『小豆嶋名所圖會』には、「海濱より眺望いたつて絶景なり。」と書かれている。

第 61 番浄土庵を経て、大木戸八幡宮を参拝する。かつては、ここが第 63 番札所だった。この本尊無量壽如来は、現在は、大木戸八幡宮の近くにある第 62 番札所大乘殿に祀られている。大乘殿と隣り合わせで、第 63 番札所蓮華庵がある。本尊は千手観世音菩薩。『小豆嶋名所圖會』では、第 64 番札所が観音菩薩を本尊とする観音堂となっているので、これが、名称が変わって蓮華庵となったのであろう。今回の遍路はこれで終了。

(6) 第 65 番～第 73 番霊場

今回は、土庄港を出発し、湊崎を通過して伊喜末方面に向かい、伊喜末から東に転じて馬越まで歩くというコースである。巡拝の順番は、57→65→53→66→68→67→69→70→71→72 奥院→72→73 である。

まず、湊崎にある第 57 番浄眼坊、第 65 番光明庵、第 53 番本覚寺の 3 霊場を巡る。土庄から湊崎に行くには、世界一狭い海峡、土湊海峡に架かる永代橋をわたるのであるが、永代橋なる橋は江戸時代にもあった。渡った湊崎には、かつては塩田が広がっていた。『小豆嶋名所圖會』は、浄眼坊について、「湊崎村にあり。當村にも鹽濱ありて、日毎に鹽竈に烟の間断なし。」と述べている。²⁸当庵は塩田の傍らにあったのであろうか。ここには町指定天然記念物のウバメガシの巨木があるが、江戸時代のお遍路さんもこれを見上げていた

²⁷ 暁、526 ページ。

²⁸ 暁、524 ページ。

わけである。次の札所光明庵も、古くからの庵である。しかし、本覚寺は、前述のとおり、宝生院の隣にあったが、火事のため昭和初期に当地に移された。

刈崎から海辺の道を一時間弱歩くと伊喜末に着く。通常のお遍路では、ここを右に折れて第 66 番等空庵に向かうのであるが、今回は反対に左に曲がって伊喜末八幡宮に行く。昔はここが第 66 番札所だった。この八幡宮も大きく立派である。小豆島各地の八幡宮では秋に勇壮な太鼓台奉納祭が行なわれるので、それなりのスペースが必要なのであろう。浜辺の鳥居のところには、馬場と呼ばれる広場があった。そして祭りを見物する棧敷が、ここ伊喜末にもつくられていた。そして標高 30 メートルの山の上に乗って行くと八幡宮があった。『小豆嶋名所圖會』の絵を見ると、浜辺の木々が切られている以外は、昔とほとんど変わっていないのに驚く。この社叢も土庄町指定の天然記念物に指定されている貴重な森である。小豆島各地の八幡宮は、どこもよく人の手が入って美しく保たれている。地域の人々が大切に守ってきた聖地であることがよくわかる。おそらく昔から、村どうしが競い合って立派な八幡宮をつくってきたのだと思う。

八幡宮を参拝して、元の道に戻り、現在の第 66 番等空庵まで歩いてお勤めをする。旧第 66 番の伊喜末八幡宮と新第 66 番の等空庵は比較するまでもない。八幡宮は千年以上にわたって村人が五穀豊穰を祈り、収穫を感謝してきた神を祀る大切な場所である。そのためふさわしい場所が選ばれており、地域の景勝地である。等空庵は八幡宮の本地仏を安置するためにつくられたあずまやにすぎない。ここでも、またひとつ小豆島遍路で訪れる美しい場所が失われたのだと思う。

等空庵を後にすると、第 68 番松林寺、第 67 番釈迦堂（瑞雲堂）、第 69 番瑠璃堂、第 70 番長勝寺の順に参拝する。これらのうち、第 67 番釈迦堂は、江戸時代は瑞雲寺という名の八幡宮の別当寺であった。神仏分離で廃寺となり、のちに小堂が建てられた。また、第 69 番瑠璃堂は、かつては薬師堂という名だった。第 70 番長勝寺には、播州赤穂の大石良雄の旧宅が庫裡として移築されたという言い伝えがあるが、『小豆嶋名所圖會』にはなにも記載がない。

長勝寺から第 71 番滝ノ宮堂への道は、長いゆるやかな登り坂である。滝ノ宮堂の少し手前に、八坂神社がある。ここが江戸時代は滝ノ宮と呼ばれた牛頭天王を祀る神社であり、第 71 番札所だった。これまで、何度もこの八坂神社の前をお遍路で通っているのだが、神社の中に入ったのは今回が初めてだった。平地にある神社で、参道、隨身門、本社が一直線に並んでおり、鳥居の横に立つと神社の奥まで見通すことができる。このような美しい構図の神社は小豆島ではここだけではないだろうか。さらに驚いたのは神社を囲む豊かな森である。筆者が訪れたのは 1 月の雨の日だったが、境内に入ると、さまざまな鳥の大合唱に圧倒された。いつもこうなのか、渡り鳥がやってきているのか、これほどの鳥の喧騒を聞いたのは、小豆島ではここだけである。豊かな森は鳥の楽園だった。この神社は小豆島一の癒しの場所ではないかと思う。まことに名所である。江戸時代の小豆島遍路を紹介した本のタイトルは、『小豆嶋名所圖會』である。なるほど、小豆島遍路は名所巡りでも



図 13 八坂神社（滝ノ宮）の森

あったのだと、ここで気づかされた。

滝ノ宮の鐘楼は文久 3 年（1863 年）に再建されたが、神仏分離により、梵鐘は明治 4 年に滝ノ宮堂に移されて今日にいたっている。鐘楼は残っているが、その中には牛の石像が横たわっているありさまで、憐れである。この状態がこれからもずっと続くのであろうか。

ここから第 71 番滝ノ宮堂、第 72 番奥院笠ヶ滝、第 72 番瀧湖寺、第 73 番救世堂の順で札所を打つ。笠ヶ滝は、現在では小豆島遍路でも一二を争う山岳霊場の名所である。断崖絶壁にはりつくようにつくられたお堂は見る人を驚かす。修験道の行場であるが、江戸時代はどのような様子だったのだろうか。ご住職の話では、管理している瀧湖寺の文書は火事で焼けて、古い時代のことがわからないらしい。『小豆嶋名所圖會』には笠ヶ滝についての言及はない。第 73 番救世堂は、かつては観音堂と言った。『小豆嶋名所圖會』には「小馬越村にあり。俗に四ツ堂といふ。本尊観世音を安す。遍禮七十三番の札所なり。堂前に富士の棚あり。花盛のころ美観なり。」と書かれている。²⁹今回の遍路はここで終わる。

（7）第 75 番～第 81 番霊場

今回は、小豆島を牛にたとえると背中の部分、すなわち島の北側の海辺を歩くお遍路である。参拝の順序は、75→76 奥院→77→76→番外藤原寺→78→79→80→81 である。

第 75 番大聖寺、第 76 番奥院三暁庵、第 77 番歓喜寺、第 76 番金剛寺、番外藤原寺は、互いに比較的近い場所にある。三暁庵、金剛寺のある屋形崎は、日本夕日百選に選ばれた

²⁹ 暁、548 ページ。

夕日の名所である。このあたりを歩くと、雄大な海の眺望が広がる場所がいたるところにある。藤原寺を過ぎると、延々と海岸沿いの道を歩く。『小豆嶋名所圖會』を見ても、昔から波打ち際の道があって、人々は海を眺めながら歩いていたようである。

小海（おみ）の第 78 番札所雲胡庵の少し手前に王子神社がある。ここは鬱蒼たる鎮守の森であるが、遍路の札所ではないので、筆者は、これまで横目で見て通り過ぎるだけだった。しかし、今回のように、八幡宮や滝ノ宮などの神社にも参拝する遍路をしていると、ここにも敬意を表して参拝しようという気になる。神社の境内に入ると、クスノキやカシなどの巨木のあるうっそうたる社叢で、県の天然記念物に指定されているという表示があった。『小豆嶋名所圖會』には「小海村の海濱にあり。林中森々として最神さびて殊勝也。」と紹介されている。³⁰太古の小豆島はこの神社のような植生だったらしい。本来の自然が神社には残っているのである。

雲胡庵を打った後も、ひたすら海岸沿いの道を歩く。第 79 番薬師庵、第 80 番観音寺も海沿いにある。観音寺は長い石段を上って寺の境内に入るが、『小豆嶋名所圖會』にもほぼ同じ絵が描かれている。ここは、昔とほとんど変わらない風景のようである。

今回のお遍路は、ほとんど海沿いの平地を歩いたのであるが、最後に小部（こべ）で山道に入り、標高 350 メートルの第 81 番恵門ノ滝まで 30 分ほど急な山道と石段を上っていく。恵門ノ滝は、現在は鉄筋コンクリート造りの横に長い大きなお堂がつくられているが、内部は三つに分かれた洞窟になっている。ここでも、現在は、真っ暗な洞窟の中での護摩祈祷が行われており、それを楽しみにしているお遍路さんが多い。『小豆嶋名所圖會』の恵門ノ滝の絵を見ると、当時は、そのような大きなお堂はなく、降魔窟と呼ばれる岩窟があって、その中に不動堂、大師堂がつくられていた。その右に二つの岩窟があり、右側の窟には一畑薬師が祀られていた。降魔窟とその右の岩窟の下には舞台がつくられていた。洞窟というが、ここも小豆島の他の山岳霊場と同様に、大きな岩の窪みであって、鍾乳洞のような洞窟ではない。かつては、光のささない真っ暗な洞窟というわけではなかったと思われる。小部の町に下りてきて、この日のお遍路は終了する。

（8）第 82 番～第 88 番霊場

今回は、小部から豆坂を上って吉田へ行き、続いてまた山越えをして福田へ行き、そこから小豆島の東海岸を第 88 番札所までたどるというコースである。巡拝の順序は、82→83→84→85→86→87→88 である。

日本中の霊場を歩いておられる石門洞のご住職によると、小豆島遍路を歩くことができれば、どこの巡礼地も歩くことができるそうである。それだけ小豆島の遍路道は起伏が大きく厳しい。今回のコースにも二つの山越えがある。小部から吉田へ抜ける山道は豆坂という。名前の由来はよくわからないが、足にマメができるからとか、昔は豆石を敷いていたからという文章を読んだことがある。昔は、この山道を越えられない人々も多かったの

³⁰ 暁、555 ページ。

で、小部から吉田まで渡し船があった。大正3年の『讃岐國小豆嶋實測量改正旅行案内地圖』によると、「小部ヨリ吉田エ海舟路二里廿丁」と記されている。江戸時代も同様の渡しがあったであろう。現在は海辺の道ができ、バスが走っている。今、歩き遍路以外で豆坂を登る人があるのだろうか。ともあれ、豆坂を登り、標高350メートルの峠を越えていくと吉田ダムに出る。井泉水は、ここで水量豊かな谷川について言及しているので、ダムのなかった時代は谷川でのどを潤すこともあったのだろう。現在は、かつての遍路道はダム湖に沈んでいる。湖を迂回してコンクリートの堰堤まで来ると、今度は落差70メートルのコンクリートの階段が待っている。そこを一気に下り終えると、第82番吉田庵がある。江戸時代は薬師堂という名称であった。

吉田から再度山越えをして福田に至る。まず訪れるのは福田庵である。江戸時代、福田には神宮寺があった。福田八幡宮の別当寺で、旧第83番札所であった。神宮寺は八幡宮の隣（現在の福田小学校のある場所）にあったが、神仏分離で廃止になり、本尊の薬師如来を安置するための庵がつけられた。これが現在の第83番福田庵である。ここを打って、続いて近くの第84番雲海寺を打つ。この境内から眺める福田港方面の風景が実にのどかで美しい。江戸時代はどうだったのだろうか。『小豆嶋名所圖會』には「當寺の堂前より海上の眺望奇観。」と書かれていた。やはり江戸時代もすばらしい風景だったのだろう。ここ雲海寺にはもうひとつ札所がある。第85番本地堂である。神仏分離で、第85番札所であった福田八幡宮は札所からはずされ、本地仏の弁財天が、神社から500メートルほど離れた当地に移されたのであった。



図14 雲海寺から福田港を望む

そこで次の訪問場所は、旧札所の福田八幡宮ということになる。ここも小豆島の他の八幡宮同様、鬱蒼たる森である。小豆島の社叢には、優占樹種の上から、ウバメガシ型、シイ・クス型、アラカシ型の3タイプがあるが、福田八幡宮の社叢はシイ・クス型だそうである。県の天然記念物に指定されている。並び立つ巨木に圧倒される。

福田八幡宮を出ると、海沿いの道を歩いて行く。海沿いに、第86番当浜庵があり、第87番海庭庵があり、そして第88番楠霊庵がある。当浜庵の旧名は観音庵、海庭庵の旧名は観音堂、楠霊庵の旧名は地藏堂であった。『小豆嶋名所圖會』には、当浜庵について、「此地はすべて海濱にして、眺望ことさらによし。」と書かれている。また、楠霊庵のある橋之浦について、「當嶋の東浦にして、阿波の鳴門より淡路の嶋山、播磨の山々見へわたりて、至つて絶景なり。」と書かれている。³¹楠霊庵は第88番札所、結願の霊場である。ここで海沿いの道から離れ、安田へ至る山道に入る。これにて今回の小豆島遍路は終了した。

4. 結語

神仏分離以前の小豆島遍路の霊場を、実際に歩いてみて気づいたことをまとめてみたい。

神仏分離で廃止になった8つの神社は想像以上の名所であった。まず、これらの神社は、江戸時代の小豆島遍路で、もっとも大きな札所であった。各地の八幡宮は、小高い山全体が神社であるから、寺院よりはるかに広大な霊場である。第二に、それらの神社の森は、太古の植生が残る貴重な遺産である。亀甲山八幡宮、伊喜末八幡宮、福田八幡宮の社叢は、天然記念物に指定されている。その他の神社の社叢も、それらに劣らぬ豊かな森である。第三に、それらの神社は、小豆島の景勝地である。旧札所の神社は、各村の最も美しい場所につくられている。富丘八幡宮は「さぬき十景」に選ばれるほどである。第四に、したがって、そのような緑豊かな神社は、最高の癒しの場である。人々がさまざまな願いごとをし、勇壮な秋祭りをする神聖な場所であるということを別にしても、これらの神社にはすぐれた美点が数多くある。要するに、小豆島を代表する名所なのである。

小豆島遍路を中心に小豆島のガイドブックを書いた暁鐘成が、その本のタイトルを『小豆嶋名所圖會』としたことの意味を考えてみたい。88のすべての霊場を取り上げ、本尊仏や神社の祭神について解説するとともに、それらの霊場の風景や霊場からの眺望を、美観、奇観、絶景、といったことばを多用して紹介している。彼にとって、小豆島霊場は名所なのである。つまり、小豆島遍路は信仰であると同時に観光でもあったということである。お遍路が現代になって観光化したような文章も見かけるが、江戸時代から観光的要素は強かったのである。ここで小豆島遍路の始まりについて書かれた『小豆郡誌』の記述が思い起こされる。そこには「本郡に於ける真言宗の緇素相諮り」と書かれていた。緇は黒衣、素は白衣、つまり僧侶と俗人が相談して八十八ヶ所霊場を定めたという。小豆島遍路は、決してプロの修行者だけの行場というわけではなく、もともと俗人の楽しみ場としても設計されていたのだと思う。

³¹ 暁、591 ページ。

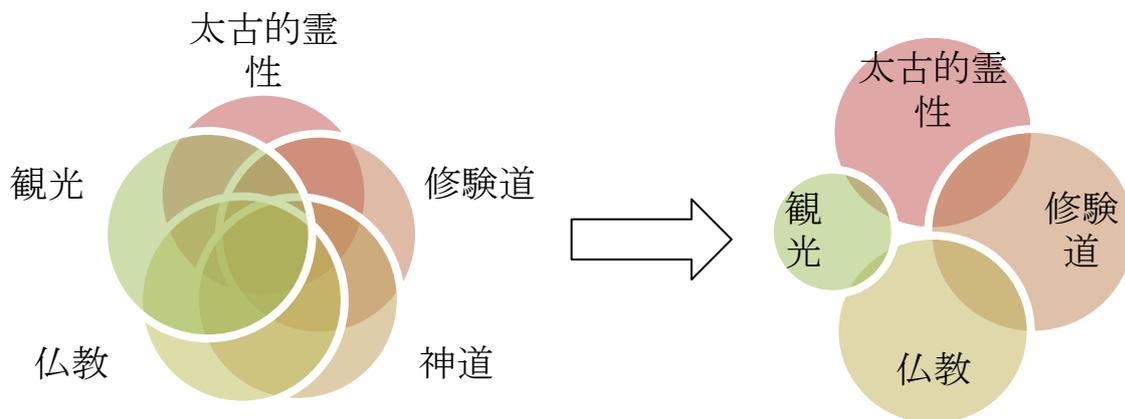


図 15 小豆島遍路構成要素の変化（検証結果）

そのように考えると、小豆島遍路の構成要素として、本稿では、当初四つの要素を考えたのであるが、実は、観光という要素も付け加えるべきだったのではないかと思う。そして、神仏分離によって、これらの 5 要素の内、神道がなくなり、観光的要素は比重が小さくなった。つまり、小豆島遍路の旧札所神社は、いずれも小豆島を代表する名所だったが、それらが外されたために、小豆島遍路の観光的価値は下がったように思われる。これを図式化すると図 15 のようになるであろう。

今回のお遍路で、神社については、旧札所の 8 つの神社に参拝する予定であったが、結局、遍路道沿いにある坂手の荒神社、西村の高木明神社、小海の王子神社にも足を運んだ。いずれも天然記念物に指定されている森である。八幡宮などの旧札所に参拝すると、自然にそのような気持ちになるのである。お遍路においては、御本尊を拝むことが目的であることはいうまでもないが、自然と一体になる感覚を味わうことも同様にだいじな目的であろう。そして、最も豊かな自然が残っているのが、このような神社なのである。本来、お遍路は仏教に限定されるわけではないのだから、八十八ヶ所巡りでそのような場所に行かない理由はないように思われる。

神仏分離以前、神社が札所だったことは知っていたが、知っていることと、実際にお遍路で神社を訪ねることは違う。筆者は、今回、江戸時代の札所を訪ねて、初めて、自分自身がいかにお遍路を狭くとらえていたかに気づいた。江戸時代のお遍路さんは、現在以上に、自然の神秘に触れ、美しい自然の風景に感動していたのではないかと思う。お遍路では神社に行かないというルールは、開国という困難な課題に直面した明治政府が自らの権威確立のために国体神学を採用したところから始まったものである。³²政治的理由でそうなったわけで、なんら合理的根拠があるわけではない。われわれは、それをいつまで律儀に守るのだろうか疑問に思う。

³² 安丸、4 ページ参照。

引用文献

- 暁 鐘成『小豆嶋名所圖會』、香川県『香川叢書第三』1943 所収
- 梅原 猛『「森の思想」が人類を救う』(小学館)、1991
- 大賀睦夫「四国遍路におけるメタファー思考について」『人体科学』第 20 巻第 1 号、2011
- 大川栄至「小豆島遍路の歴史と特質」、(土庄町立中央図書館蔵書論文) 2009
- 荻原井泉水『遍路と巡禮』創元社、1934
- 小田匡保「小豆島における写し霊場の成立」真野俊和編『講座日本の巡礼 第 3 巻 巡礼の構造と地方巡礼』(雄山閣出版)、1996
- 香川県小豆郡内海町『内海町史』1974
- 香川県小豆郡役所編『小豆郡誌』1921、復刻版 1973
- 川野正雄『小豆島今昔』(小豆島新聞社)、1970
- 『月刊ぴーぷる』11 月号別冊 (マルシマ印刷)、1995
- 五来 重『空海の足跡』(角川選書) 1994
- 『四国遍路の寺』上 (角川文庫) 2009
- 神道文化会編『自然と神道文化』(弘文堂) 2009
- 真念『四国遍路道指南』(1687)、伊予史談会『四国遍路記集』(1981) 所収
- 南方熊楠『南方熊楠全集』第七巻 (平凡社)、1971
- 頼富本広『四国遍路とは何か』(角川選書) 2009
- 安丸良夫『神々の明治維新』(岩波書店) 1979